

国際交流事後活動ニュース

# MACROCOSM

◎特集 21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい

マクロコズム 2003.11



vol. 55

(財)青少年国際交流推進センター

## 「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業（第3回）

（2003年9月18日～10月1日）



▲ 開会式にて各国ナショナルリーダーに記念写真をリクエストされた山本内閣府政策統括官



歓迎レセプションには、各国大使館からの出席も得て

▼ オリエンテーション会場にて



第3回を迎えた本事業は、昨年同様に20か国から代表を招き、開発、教育、リーダーシップ、マスコミュニケーションの4分野に分かれたコース設定で実施されました。招へい国は、「東南アジア青年の船」参加国であるアセアン10か国と「世界青年の船」参加国から10か国で、次の通りです。（ブルネイ・ダルサラーム国、カンボジア王国、インドネシア共和国、ラオス人民民主共和国、マレーシア、ミャンマー連邦、シンガポール共和国、フィリピン共和国、タイ王国、ベトナム社会主義共和国、オーストラリア、カナダ、コスタリカ共和国、エジプト・アラブ共和国、グレート・ブリテンおよび北部アイルランド連合王国、フィジー諸島共和国、ギリシャ共和国、インド、メキシコ合衆国、タンザニア連合共和国）

今回の課題は、事業終了後の具体的活動の提案とその実現にむけた同窓会組織としての連携でした。活動提案については意欲的に提案がなされ、すでに帰国した外国青年が取組み始めた動きもでていますが、これからの継続した連携が大切なところです。

ヤングリーダーズ・フォーラム（9月20日～23日）

全国から応募した日本の既参加青年も交えて、開発、教育、リーダーシップ、マスコミの4分野に分かれ分野毎に各国事情発表や専門家を招いてのディスカッションなどを中心プログラムとして、3泊4日で実施されました。

教育コース



▲ 自国の国際理解教育の状況を発表するイギリスの代表



▲ 筑波大学附属高等学校にて授業に参加



マスコミ・コース  
「戦争広告代理店」の著者である高木徹氏を招いて（右側が高木氏）

リーダーシップ・コース  
国連高等難民弁務官勤務経験を持つ名古屋大学大学院山本芳幸助教を迎えて



全体発表（各コースからアクションプランを含めて活動発表）



▲ 日本参加青年に修了証書を授与する中田国際担当企画官



▲ 開発コースからの PC プレゼンテーションでの発表

▼ さよならランチパーティにて



# 「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業

## 課題別視察

### 開発コース



「六本木ヒルズ」を訪問し、「森ビル」の方から都市開発についての考え方を伺う

### マスコミ・コース

▼ 上智大学学生との懇談会を終了して



## 地方旅行

ホームステイ1泊を含めたコース毎の地方旅行は、日本に各分野事情を知るための貴重なチャンスとなりました。  
(地方旅行の続きは、P.21～22へ)

### 開発コース (宮崎県)



▲ 第6回「青年の船」参加青年であり、内閣府青年国際交流事業の大先輩にあたる安藤忠恕知事へ表敬訪問(左から二人目、安藤知事)

アジア砒素ネットワークでの懇談



## 「東南アジア青年の船」から「ルネッサンス」へ ～グローバルネットワークへの掛け橋～（仮訳）

タイ参加青年

パティーマ・リタ・カイボーンターン

私にとっての日本との関わりは、2000年に行われた「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）への参加から始まりました。SSYEAPは、私にとって日本について、そして世界的なネットワークについて学ぶことになった刺激的な経験でした。そして、再び日本を訪れ、「東南アジア青年の船」事業と「世界青年の船」事業との友情を育む「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業に参加できたことは私にとってとても名誉なことでした。

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は世界中の青少年リーダーにとって、日本との相互理解を深め、国際協力に取り組む新しい舞台です。日本人と海外からの参加青年との14日間に及ぶ交流プログラムは、東京プログラムと地方プログラムとで構成されるものでした。

岩手県での地方プログラムには、表敬訪問、県庁訪問、マスコミ関係団体の訪問、地元青少年との交流、そしてホームステイがありました。東京から盛岡までは、新幹線で2時間半程かかりまし

た。私にとって新幹線に乗ることは初めての経験だったので、日本の主要都市を結ぶ高速交通手段での体験はとても刺激的なものでした。

盛岡に着い、最初に中村盛岡市長に対する表敬訪問を行いました。岩手県庁では、広報・コミュニケーション担当の方を訪ね、岩手県について、そして岩手県の広報活動について学びました。

夜には温かい歓迎レセプションで迎えられ、ホームステイ受け入れ家族の方々とのマッチングが行われました。木笛と太鼓の音楽に合わせて踊られた伝統的なさんさ踊りを私達はたいへん楽しみ、そして我々マスコミコースメンバーはタイ、ギリシャの踊りやサルサダンスを踊りました。レセプションでの文化交流は岩手の方々和我々との友情の始まりでした。

9月26日の未明に、私達のいた盛岡市で2度の地震を感じました。テレビを通じての緊急報道で日本の他の地域で地震があったことを知りました。我々コースメンバーの何人かにとっては、地

### \*\*\*\*\* 主な内容 \*\*\*\*\*

21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい…5～7	～皆で上がった次へのステップ
国際青年育成交流事業（招へい）……8～12	～つなげていくことの大切さ
～滋賀県・鳥取県～	ASEANより～ラオスから……17～18
日韓予備連絡会議の実行委員より……13～17	～亜州青年論壇（マレーシア）に参加して…18
～韓国派遣団「次代へのステップ」を考える	関東ブロック大会のお知らせ ……20

#### 〈表紙の説明〉

第12回「世界青年の船」  
三田景子さんより  
～ラオスの小学生～

震を経験すること自体が初めてでした。

岩手での二日目は、盛岡にあるマスメディア関係への課題別視察を行いました。IBCという24時間放送のラジオとテレビの放送局に続きTVTローカルケーブルテレビ局を訪ねました。その後は我々は4つのグループに分かれ、それぞれ「FM岩手」、「マシェリ」、「岩手日報」、「盛岡ソフトウェアセンター」を訪れました。私の属するグループは「マシェリ」を訪問しました。この会社は地域でのローカル無料週間情報誌を発行していて、そこで私達は「日常生活におけるメディアのあるべき姿」についてディスカッションをしました。アドバイザーである川上和久教授がディスカッションに参加してくださったおかげで議論は多くの経験、理論、そしてコミュニケーションの今後の動向も織り交ぜながら非常に意義あるものでした。

「マシェリ」は盛岡市民の特定のニーズに応えているのでとても成功しているメディアでした。読者は、岩手近郊でのお薦めの場所や活動を楽しむにしており、地元のニュース、イベント情報、そして盛岡に住む多くの家族にとって役に立つ便利な情報が掲載されているメディアです。

ディスカッションとプレゼンテーションは、日本の参加青年と交流する機会の一つです。私達は互いの経験を共有し、私達の生活の中でのマスメディアについて意見を交換しました。我々が学んだことは、この情報化時代に生きる地元の人々が必要としているものとマスメディアが提供するものとのギャップを埋める、ということです。岩手滞在中の最も印象深い体験の一つとしてホームステイが挙げられます。盛岡から車で1時間ほど移動した佐藤さんのお宅でホームステイが出来

たことは、とてもすてきな経験でした。花巻市は著名な作家宮沢賢治の故郷として知られており、私のホストマザーと彼女の友人は、宮沢賢治ゆかりの地へ連れていってくれました。

夜は、ホストマザーが彩り鮮やかな日本の夕食をご馳走してくれました。私は、タイの踊りを教えたり初心者向けの日本語を教えてもらったりして素晴らしい交流の時間を過ごすことが出来ました。

ホストファーザーは写真家で、ホストマザーは絵はがきの編集をしています。偶然にも私も写真を撮ったり絵はがきを書くのが好きなので、佐藤家のみなさんとタイと日本のことについて話をしたことはとても楽しい経験でした。

盛岡での最後の昼食もとても印象的なものでした。というのも、「わんこそば」を競って食べたのです。わんこそばは自分のすぐ後ろに立つウェイトレスが小さな漆器のおわんに入れてくれるそばを何杯もおかわりをしながら食べるのですが、ホストファミリー、地元青年、海外青年もみんなで日本の伝統的な食文化のスタイルを楽しみました。

盛岡を発つときにはお別れをしなければいけない時間でした。それは終わりではなく、私達の友情と力強いネットワークの始まり、ということを私は知っています。岩手のプログラムは非常に実りあるものであり、いつかまた訪れたいと思います。

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業はマスコミュニケーションの分野での私にとっての新しい目標の始まりです。マスコミコースでは日常生活の中でのマスコミについて、報道倫理について、また各国のメディア事情、日本国内の地方におけるマスコミの在り方を学ぶことが出来ました。そして、世界なネットワーク、何よりマ

スコミコースを通じて多くの友情を得ることができました。

最後に、このような機会を与えてくださった日本国政府、日本青年国際交流機構、岩手県での受け入れ実行委員の方々、タイにおける SSEAYP の同窓会組織、2000年に実施された SSEAYP、財

団法人青少年国際交流推進センターの方々に、感謝の意を伝えたいと思います。21世紀における未来のリーダーのためのプログラム、すなわちグローバルネットワークの掛け橋のための「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業に招待していただき、本当にありがとうございました。

## 岩手県プログラム事業報告

岩手県青年国際交流機構会長  
伊藤 純

岩手県における「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業地方プログラム準備は、今年が開催県であった北海道・東北ブロック大会の終了後である7月からスタートしました。

来県する青年達のテーマは、「マスコミュニケーション」。思えば、私たちにとっては、このテーマが岩手での事業で乗り越えるべきひとつの「壁」であったと感じています。

当県は、早くから東北新幹線、東北自動車道等といった公共交通アクセスの整備は進んでいるものの、情報通信レベルでは、他の地方県並み。近年は、インターネットを中心とする情報通信媒体の進展により情報格差はなくなりつつあるとはいえ、質・量とも中央に圧倒されつつある現実の中で、このテーマの下に世界各国から訪れる青年達に、岩手の持つ何をどのように伝えるかが私たちにとっての大きな課題でした。

その結果、私たちは、岩手におけるトピックを「生活に密接したマスコミュニケーションのあり方(What Mass Communication in our Lives Should Be)」とし、地方の地方たるゆえん、つまり、地

縁や血縁、近隣とのコミュニティを生活の基本としていることを第一に考え、地域や生活の様々な場面から発する情報化、また、情報を受動する客体としての個人にも目を向けた意見交換や交流ができれば、と考え、このプログラムに取り組みました。

盛岡の人口は約29万人。まずは地方都市の情報発信基地を見てもらい、各国との違いを紹介することにしました。社会人と学生の日本人青年を含んで4グループを編成し、地元の新聞社、放送局、FM局、ケーブルテレビ、情報誌(フリーペーパー)、ソフトウェア会社をグループごとに見学し、その後、トピックの下にグループディスカッションを行いました。各班とも自分の国の事情を説明しながらのディスカッションは大いに盛り上がった様子でしたが、目指すところのテーマのまとめに導くには時間が十分でなかったことが反省点であると感じています。

参加青年達が岩手の地をどのように感じたか、一人ひとりから話は聞けませんでした。地元青年との交流会、ホームステイ、歓送会と、日ごとに一層明るく元気な青年たち、そして盛岡駅での見送りの際に見せてくれたすばらしい笑顔をからも、岩手での地方プログラムを十分に楽しんでくれたものと自負しているところです。

## 滋賀県における受入体制

滋賀県政策調整部青少年室

早瀬 澄子

滋賀県では、内閣府の国際青年育成交流事業の地方旅行を1回目から受け入れており、今回で10回目の受入れとなったが、3年前からプログラムの企画実施を滋賀IYEOを中心とした実行委員会へ全面的にお願いし、行政はできるだけ関わりを少なくして、青年達の主体性に任せることにしている。というのは、事業に参加することによって青年同士が交流を深めることも大切だが、それより一步前進し、滋賀県の青年が主体的に考え行動し、社会に貢献する「社会参加活動」を行う場として、またその実践力を養う場として、この事業は滋賀県の青年達にとって大変貴重な機会だと考えているからである。当初は紆余曲折あったものの、青年達の力は年々増しており、今年は特にそれが顕著に感じられた。

まず始めに、事業を毎年実施することによって、青年同士のつながり、輪がどんどん広がって、今年は実行委員として20名もの青年が活動に参加した。次に、プログラム全体をコーディネートするだけでなく、ウェルカムパーティーで日本青年が歓迎の歌を披露したり、フェアウェルパーティーでは滋賀県での滞在を振り返るスライドショーや修了証の授与を行うなど、細部にわたって工夫がされていた。さらに、昨年に引き続き、「希望が丘」での野外活動を伴った宿泊交流など、少し型破りではあるが、とても和気あいあいとしたすばらしい交流ができたと思う。そして、交流全般にわたって実行委員の外国青年に対する奉仕的精神、頑張りには大変感心させられるものがあった。

一方、今後の課題としては、実行委員の思いが

先走り、日程がハードになったり、細部に目がいきすぎて全体の運営が滞ったり、特定の人に負担がかかる場面が見られたことだった。

職場や学校での人間関係を越えて、様々な立場の青年が同じ目的のために集まって活動すること、普段とは違う一面を持つことは、青年達にとって貴重な経験だと思う。ただ、このような団体の場合、やはりみんなをまとめるリーダーの力量に頼るところが大きいのだが、20代は環境の変化が激しい時期でもあるので、うまく世代交代しながら、今後もこの活動が続いていってくれることを期待している。

ドミニカ共和国(10名)、トルコ共和国(10名)

期 日	行 動 日 程
7/21(月)	到着日 清水寺見学、周辺散策／オリエンテーション／ウェルカム・パーティー
7/22(火)	比叡山延暦寺(僧侶講話、境内見学) 知事表敬訪問(滋賀県公館) 琵琶湖周航(琵琶湖汽船ミシガン) スポーツ交流会(ボーリング)
7/23(水)	滋賀県希望が丘文化公園 青年の城着 開会式・オリエンテーション(野外活動センター) 昼食(野外テント、バーベキュー) レクリエーション／クラフト活動(焼杉) キャンプファイヤー(ファイヤー場)
7/24(木)	朝のつどい(ラジオ体操) 希望が丘文化公園発 琵琶湖博物館見学 〈オプション〉クラフト活動(よしフレーム作り)
7/25(金)	中学生と交流会(甲賀中学校) 草津市立まちづくりセンター着、自由行動 ホストファミリーとの対面式
7/26(土)	ホームステイ
7/27(日)	ドミニカ共和国・トルコ共和国セミナー フェアウェルパーティー(ホテルボストンプラザ草津)
7/28(月)	アンケート記入／帰京



## Friends, Friends, Forever!

受入実行委員長  
滋賀県青年国際交流機構会長  
三浦 初美

滋賀県 IYEO は、20 代の学生・社会人たち計 20 名の実行委員会を組織し、8 日間の地方旅行プログラム全般の企画運営を行った。委員会には内閣府派遣事業の既参加者だけでなく、今年度派遣される青年、地元の国際交流に興味がある青年たちも主力として参加し、本番まで 12 回の会議を重ねて準備を進めた。滋賀県 IYEO が育成交流事業を受け入れるのは 10 回目であるものの、今回の実行委員のほとんどは 2 回目または初めての参加であり手探りでの運営だったが、記念すべき年により活動ができるよう、様々な工夫を凝らした。

今回の受入れのテーマは“Friends, Friends, Forever!”。これはこの年ヒットした SMAP「世界でひとつだけの花」の曲にあわせ、ある委員の知人が作った英語詞にてでくるフレーズだ。実行委員は、10 回記念の T シャツをそろえ、この曲を日本語と英語、そして振りつきで歌い、歓迎の気持ちを込めて披露した。プログラム設定でも、交流活動を重視し、ホームステイにならぶ思い出深い機会を提供しようと、パートナー制やスポーツ交流、中学校訪問など様々な交流会を実施した。とりわけ、大勢でたっぷり特別な体験をしたいと考え、希望が丘野外活動センターにて、50 人でのバーベキューやキャンプファイヤー、キャビンでの宿泊も実現させた。

多数の青年が委員として参加し、独自のプログ

ラムを実施する成果があった一方、委員の青年は準備・裏方に徹する場面が多く、外国青年との交流が中途半端になるという面もあった。その原因として、役割分担が不明瞭だったり、進行役に力不足な面があったこと、また各自の語学力や社交力の壁、外国語を使うより日頃接点のない地元青年間の交流を楽しむ傾向もあったと考えられる。

もちろん、ドミニカ共和国の軽快なメレンゲダンスや、トルコの奥深く多様な文化紹介などに接したり、それぞれが個別に語り合ったりふざけあったりするなど、国際交流する場面も大いにあった。また委員による運営の不十分な点も、外国青年たちのゆったりした気構えや、行政やセンター、通訳、ホストファミリー、一般参加者、訪問先の担当者の方々の温かいご協力に助けられて、事故なく和やかで元気な滋賀県でのプログラムが実現でき、お互いの思いやりの生む力の大きさを知った。また、新しく滋賀県 IYEO の活動に興味を持ってくれた地元青年にも多数出会うことができた。

今回の受入れの反省をふまえて、滋賀県 IYEO では年度後半も定期的に集まり、組織力や英会話力、また滋賀文化の発信力を高めていく集まりを開催していこうとしている。また、受入れで友情を育んだ国を訪問したいという案もある。今回の事業で生まれた絆を強め、今後の受入れをより楽しく充実したものとするために、滋賀県 IYEO はより活発になろうとしている。

## ホストファミリー体験記

滋賀県ホストファミリー 沖 左知子

今年の本初めて「英会話の一步」と書き一念発起。5月から始めた公民館の英会話講座の先生の紹介で、今回のホームステイを受けることになった。英会話も全然自信がないし、食事や身の回りのことも心配で一人躊躇していましたが、夫や子供達は賛成。前夜には家族紹介の予行練習まで行われた。

当日、センターでの対面式。お互い名前しか知らない外国青年とホストファミリー。ドキドキしながら、青年一人一人からの発表を待った。「ワタシノホストファミリーハ、オキサンデス」。笑顔のアルフィオさんに息子が首飾りをかけにいき、「ナイスチューミーチュー」。もうすっかり二人は友達だった。さて、我が家に到着。座敷でお待ちかねの家族紹介が行われ、おじいちゃん、おばあちゃんも戸惑いながら握手。初めての海外からのお客様にまんざらでもなさそう。さあ、すきやきを囲みながら、ジュエチャー交じりで会話(?)が始まった。

子供達は部屋を案内したり、花火を一緒にしたり、片時も彼のそばを離れようとしなない。彼も子供好きなのか、笑顔で相手をしてくれた。

次の朝、まだ寝ている彼に「グッモーニング!グッモーニング!」。ごめんなさい、子供達は待ちきれなかったようだ。「日本では、自分専用の食器を持っているのよ」とささやかだが、彼の食器を用意したら、とても喜んでくれた。そして純日本風の朝食ののり、うめぼし、お味噌汁、なっとう、焼き魚に、「ホワットジス?」といいながらトラ

イしてくれた。

朝食後、散歩がてら家のまわりの探検に出発!お寺や神社、近所の人に自慢の盆栽を見せてもらったり、かんぴょうむきを教えてもらったり、田舎のふだんの生活は、彼の目にどう映ただろう。そして、彦根城へ。日本の文化に興味がある彼はずっとビデオをまわしていた。帰りに寄った100円ショップもおもしろかったようだ。

さて、夕方からメインのイベント、バーベキューパーティと演芸大会が始まった。英会話の先生やお友達、スタッフの方にも来ていただき、庭が即席の演芸場になった。コカリナ、たけとんぼ、こままわし、お手玉、竹笛。そして、着物姿もあてやかな日本舞踊。いつしか近所の人も見に来て拍手をしてきていた。みんなで歌を歌い、アルフィオさんのすばらしいピアノ演奏に酔いしれ、踊ったり、手拍子をしたりして、夜のふけるのも忘れるほどだった。

別れの朝、アルフィオさんが子供達にメッセージを書いてくれたのだが、彼も涙がとまらない。お別れのパーティの時も、子供達が泣きやまず、つられて私も…。

ドミニカ共和国の皆さん、トルコの皆さん、滋賀に来てくださってありがとうございます。企画、運営をして下さったスタッフの皆さん、このチャンスを与えて下さった英会話の先生に、心から感謝したい。

そして、アルフィオ・ロラさん、ありがとう。あなたは、ドミニカ共和国に住む私達のもう一人の家族だ。SEE YOU SOON.

## 国際青年育成交流事業を受け入れて

受入実行委員長

とっとり青友会副会長 齊藤 信夫

### ■事業を受入れた目的

とっとり青友会は、県内に在住する国際交流に関心のある大学生、社会人の青年と世界各地の同世代の青年による相互理解、友好交流を促進するため、また、鳥取県は近隣諸国との交流が活発化しており、その活動も大切にしながら、多様な文化や習慣を持つ国々との理解・交流を深めるために、国際青年育成交流事業の受入れを希望した。

### ■プログラムのねらい・目標

今回の地方プログラムでは、2つの目標を立てた。ひとつは鳥取の特性を活かすため、日本の地方文化を経験してもらうこと、鳥取＝田舎というイメージをポジティブにとらえ、地方旅行が外国青年にとって癒しの滞在となるような日程を組むことである。二つめには外国青年と地元の青年とが十分にお互いを知り合い、真の友情を築くことができるような機会を作ることだ。これは大山合宿という外国青年と地元青年が1泊2日にわたり交流を行うというプログラムで実現した。

### ■受入れにあたっての苦勞

大山合宿など、最も事業成果の上がるプログラムは、参加者の募集や事前の準備などに相当の時間と労力が必要で、大学生が中心となって進めた実行委員会も全体確認が十分にできず、小さな懸案を抱えながらの実施となった。また、ホームステイでは、SARSの影響を少なからず受け、26家庭の確保にも非常な労力を費やした。

### ■受入れ後の感想

これまでは、たとえばディスカッションをするにしても、半日、実質3時間程度で討議をしていた。自己紹介、テーマの趣旨理解に大半の時間を割いてしまい、その後の意見交換を入れると時間不足は否めないものだったが、合宿により時間を気にしなくてすむ環境作りをしたことで、お互いの考えを十分に理解できる貴重な機会となった。この部分は最も苦勞したプログラムだったが、成果も最大のものとなった。

### ■この経験を活かした今後の活動

上記の経験をもとに、今後の様々な交流活動のなかで、意見交換・討議を必ず組み入れ、そして十分な時間設定に配慮したいと考えている。体験型の交流プログラムの重要性が認識されている昨今において、意見交換・討議もその重要な手法であることを、受入プログラムの必須実施条件に挙げて継続し、事業報告会などで広くその内容を沢山の青年にPRし、記録し、実績として蓄積していきたいと思う。



合宿にて、じっくりディスカッションに取り組む ▶

## ホストファミリー体験より

私は英会話教師を職業としているが、海外への渡航経験は余り多くなく、いつも機会があれば、世界中の友人とたくさん交流したいと思っていた。その折、新聞の案内記事に出ていた内閣府主催の国際青年育成交流事業のホストファミリー募集を見つけ応募した。応募時に事業の説明を聞いたのだが、同世代の青年が多く実行委員スタッフとして参加していて、活気が感じられたのも、ぜひ受入れをしようと思った理由だ。

### ■受入れ前の気持ち

ホームステイを経験するのは初めてだったが、事前に受入青年のアプリケーションフォームなども拝見し、とても素晴らしい女性であると確信していたため、不安はなく、早く会いたいという気持ちでいっぱいだった。

### ■受入れ後の気持ち

レティシア（ウルグアイ）とは空港で会った瞬間から自然にハグをしてしまうほど、お互いに親しみを感じる仲だった。地球の反対側に位置するウルグアイから、小さな国日本へ、そしてその中でも小さな街米子の我が家へレティシアはやってきたのだ。本当に会おうべくして出会ったとしか思えない、ミラクルなものだったと心から思っている。

彼女は建築を勉強しているのだが、そこから日本建築そして日本という国へと興味を広げていったようだ。そのため、日本について多くのことを知っており、私たちが日本の説明をしてもいつの間にか彼女から教わって「へえ〜っ!」といっ

鳥取県ホストファミリー 高坂 幸子

ている場面が多々あった。日本についてそれだけ知っているのも、もちろん自国・ウルグアイについては（政治・経済・歴史）本当によく知っていて感心した。国際交流をするにあたり、自分の国についての知識を持つことは、まず第一のポイントではないかと思った。

レティシアはとても素敵な笑顔の持ち主で、その笑顔を誰にでも振りまいてくれるような人である。彼女の人柄、優しさ、あたたかさなどが、その笑顔を通して言葉の通じない父と母にも届いた。

### ■この経験を活かした今後の活動

彼女との友情の始まりはたったの3日間だったが、今はE-mailや手紙を通じて、絆は更に深まり続けている。人との出会いは素晴らしいと思う。これからの人生で最も大切にしたいことの一つである。これからもこの経験を活かして、たくさんの人と出会い、友情を築いていきたいと思う。

▼ ホストファミリーとともに



## 韓国派遣団「次代へのステップ」を考える ～2003年夏、ソウル 日韓予備連絡会議報告～

2002年日本・韓国青年親善交流事業参加青年  
日韓予備連絡会議実行委員長 山崎 庸貴

日本・韓国青年親善交流事業が始まり、今年で17年目を迎えます。第17回目となる2003年の派遣事業を前に、私たち韓国派遣団OBは「日本・韓国青年親善交流事業 既参加青年予備連絡会議（通称：日韓予備連絡会議）」を開催いたしました。今回の日韓予備連絡会議は、その名称に「予備」という文字が付いているように、来年度開催予定の第1回日韓連絡会議に向けた準備会合としての意味合いを含ませたものでした。しかし、その内容は準備会合の枠を超え、非常に完成度の高い充実したものであったと自負しております。

会議は8月29日（金）から31日（日）まで2泊3日の日程で、韓国・ソウルにある青少年活動施設「国際青少年センター・ドリームテル」を会場に開催しました。韓国派遣団OB会のメーリングリスト等を通じて参加を呼びかけた結果、日本側から約20名、韓国側からは約30名ものOBが集まってくださり、総勢で50名を超える規模の大きな会議となりました。この数字に主催者として嬉しい驚きを感じると共に、改めてOBの国際交流にける想いが伝わってまいりました。

そもそも、日韓予備連絡会議開催は次のような経緯から始まりました。冒頭にも述べたとおり、日本・韓国青年親善交流事業は17年もの歴史を持ち、相互に派遣され参加者は、日本と韓国を合わせて1,000名を超えます。しかし、派遣事業の



▲ 司会を務める川嶋君と高橋さん

中に、互いの団員が交流を持つプログラムが導入されたのは1998年派遣以降のことで、それ以降も単年度の団員同士が交流を続けていくことはありましたが、年度を越えた交流が持続していくことはありませんでした。さらに、韓国には日本のIYEOのような事後活動組織が整備されておらず、派遣で培った経験を生かす交流の場が存在しないという問題も抱えていました。

このような事業の問題を解決し、日韓双方の派遣団員間の連帯をさらに強固にするため、主に1998年以降の派遣団員OBたちが様々な交流活動を行ってきました。そして、今年度、2002年派遣団員が中心となり、これまで個々に行ってきた交流活動の集大成としての「日韓連絡会議」を開催しようとの構想ができあがった次第です。

## 日韓予備連絡会議

今年度の日韓予備連絡会議では「つなげよう次代へのステップ」とのテーマを掲げ、以下のようなプログラムを開催しました。

今回、実行委員として活躍してくれた10名のうち、2名に体験や感想を語っていただき、どのような会議だったのかを振り返っていききたいと思います。

### 日程表

29日(金)	年度別懇親会
30日(土)	連絡会議全体会／ワークショップ プログラム／OB懇談会
31日(日)	オブショナルツアー



## 皆で上った次へのステップ

2002年日本・韓国青年親善交流事業参加青年  
実行委員 高橋三代子

今回、「日韓予備連絡会議」を開催するにあたり、私の中には一つの挑戦があった。それは、「発表・ディスカッションといった一段階上の要素をプログラムに取り入れたい」というものだ。飲み会を中心とした同窓会ならば、今まで何度も行われてきているし、それが一番簡単に計画できる集まりではあるだろう。だが、それは果たして、交流の今後の発展に十分に貢献するものかと言えるだろうか。発表・ディスカッションといった、「堅めの」プログラムというのは、参加する側の意識と熱意が高くなければ、また計画する側もその熱意を信用してでなければ、行えないものである。私は、去年の派遣&招へいで感じた皆の熱意を信じ、留学先のソウルで韓国側のメンバーと計画を練り始めた。

隣の国であるとはいえ、日韓の実行委員全員が集まることのできない状況をくぐり抜け、何とか開催までこぎつけた。

年度の垣根を越え、日韓40名以上が集まった当日。司会をする私の心配をよそに、会議は実行委員がイメージした通りに進行していった。日韓

代表1名ずつの基調発表を終え、「私たちが考える次のステップ」をテーマにグループ別の討論を行った。そして、ワークショップ。討論の結果を色画用紙に作成し、発表。貼り絵あり、お絵かきありで、会場は幼い頃に戻ったような雰囲気に変したが、この「一緒に一つの物を作り上げる」という意識こそが、この会議を成功裡に終えることができた一要因であるように思う。

会議全体としての一つの結論を得たわけではない。だが、6グループの発表には、どれも交流を途切れさせることなく続けようとする意志と、未来への期待があった。私達は皆同様に、ステップを踏んでいこうとする当事者であり、この事業の発足者であった。皆でその気持ちを確認した、その事がもう十分な「次へのステップ」となったのだと私は考える。

会議の成功と共に、「継続のための体制確立」が課題として残されたが、「何でもやればできるのだ」という自信も生まれた。一段上れば、また次の一段が見える、そんな気持ちで、息の長い事業にしていければ、と思う。

## つなげていくことの大切さ

2002年日本・韓国青年交流事業参加青年

実行委員 川嶋 伸明

「この会議に参加できて、また国際交流の気持ちが高まったよ。」

こう言ってくれたのは1998年、今から5年も前に派遣事業に参加した韓国の青年でした。派遣時に感じた喜びや感動を忘れていた自分に、また活動の機会を与えてくれたのだと語ってくれました。

日韓青年合わせて50名が集い、互いに笑い、語り合い、そして友情を確かめ合う、その姿を垣間見て、「つなげよう次代へのステップ」という今回の日韓連絡会議のテーマであるこの言葉がどれほど素晴らしいかを実感してきました。どこかで私達、派遣事業参加者は派遣の喜びや感動に満足し、その気持ちを次の派遣事業参加者へとつなげていくことを軽視してきたのかもしれませんが。国際交流の大切さというのは一度きりの出会いにだけではなく、その関係を維持し深め、友情を育んでいくことに本質があるような気がします。

今回実行委員として、このような日韓合同会議を開催するに当たり二つの危惧がありました。一つは日本青年が企画した会議に多くの韓国青年が賛同してくれるかということです。これは彼らの嬉しそうな顔を見て杞憂だったと確信できました。そしてもう一つは参加者の中に2003年のメンバーが日本側に3名、韓国側に8名もいたことでした。ご存知のようにこの時期まだ彼らは互いに派遣事業というものを経験していません。その彼らが何を感じ、何を得、国際交流というものをどう捕ら

えるかというのは、私自身想像がつきませんでした。けれども最終日に日本側の参加青年から「本当に派遣前にこの会議に参加できて良かったです。」との言葉をかけてもらい、思わず目頭が熱くなりました。

その彼らも元気に派遣事業へと赴きました。そして着くや否や現地の2003年韓国青年から、楽しい交流を進めているとの報告ももらいました。事前に出会えたことで、いくらか心に余裕のある連絡会議の参加者が全員との間で潤滑油的な存在となっているとのことでした。この時初めて「ああ、つながっているのだな。」との実感と確信を得ました。

つながっていくこと、つなげていくこと、つながろうとすること、それは何も外国青年との交流のみならず、同じような想いを持った日本の青年との交流においても大切なことなのかもしれません。そうして自分の国際交流への熱を維持し、また高揚させ、さらなる舞台で活躍できる大きな原動力を担えるのだと思います。

私達が派遣で感じた感動を、横の繋がりのみならず縦のつながりにも波動させて、より強固で堅固なOBOG組織を作っていきたいと思います。



## ～まとめとして～

実行委員長 山崎 康貴

二人の報告にもあるように、会議に集った参加者＝同じ日韓交流事業を体験した（或いはこれから体験する）仲間たちの、日韓交流に対する高い意識が会議の成功に大きく寄与したことは言うまでもありません。しかし、前述の通り、今回は「第一回日韓連絡会議」開催に向けた準備会合としての開催です。来年度、再来年度と継続して会議を開催していくことが、私たち実行委員共通の目標であり、本事業の本当の目的のひとつです。そのためには、この予備連絡会議をここで終わらせることなく、その反省点や来年度に向けた課題をきちんと評価する必要があります。会議開催から1か月が過ぎたこの時期、私たち実行委員はこの報告をまとめると共に会議の評価を行い、来年度への引継ぎ事項をまとめている段階です。

「第一回連絡会議」開催に向けた課題としては、次のようなものが挙げられます。まず、実行委員選出の問題です。今回は、昨年度日韓青年親善交流事業に参加した2002年度参加青年が中心となって実行委員を組織しましたが、会議の趣旨・目的等を考えると、やはり多年度の参加青年で構成される実行委員会が望ましいと考えます。実行委員会と各年度参加青年との橋渡し役を担うと共に、各年度が独自に行っている交流のノウハウやネットワークを共有することによってより幅広い事業内容の策定が可能となるからです。さらに、日韓双方の青年から構成される実行委員会なので、どうしても言葉の壁にぶつかる場面が出てきます。これは実際の会議開催にあたってとも言えることで

すが、双方の意見交換を円滑に行い、より効率的に会議運営を行うために語学に精通した参加青年の協力を仰ぐ必要性は常に生じてくるでしょう。

また、本会議の方向性と今後の展開についても十分に議論する必要があります。開始にあたっては「日韓青年親善交流事業既参加青年同士の交流、及びその継続」を主な目的に企画して参りましたが、今後も既参加青年の交流のみを目的に据えるのか、或いはこの会議を起点に何らかの提言を行えるような性格を持たせるのか等、より多くの方々からご意見をいただきながら本会議の展開についても課題としていきたいと考えています。今後、会議の規模拡大が進めばそれ相応の正式な事業として発展させていこうという議論も出てくることでしょう。むしろ、そういった、より発展的な集まりを目指していくことが求められているのだと感じます。

最後になりますが、今回の「日韓予備連絡会議」開催にあたり、ご挨拶をお寄せくださったIYEOの酒井会長、ご協力いただきました推進センターや千葉IYEOの皆様方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。また、会議に参加いただいた日韓双方のOBの皆さん、実行委員として活躍くださった皆さんにも厚く感謝いたします。



## ラオスから

第12回「世界青年の船」事業参加青年

三田 景子

サバイディー、みなさんこんにちは！私は今、インドシナの内陸国ラオスの首都ビエンチャンにいます。NGOの職員として駐在しています、ここでの生活は通算1年8か月になりました。簡単にラオスの概要を以下にご説明しますと：中国、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイの5か国と国境を接し、人口約500万人、50とも60とも言われる民族がおり、昔フランスの植民地だった社会主義国、そして一人あたりの平均年間所得は約300\$（日本の100分の1以下）で‘最後発国’に分類され、国際機関、各国政府やNGOが様々な分野での支援活動を行っています。しかし、果たしてこの国を‘貧困’という言葉で片付けることができるのでしょうか…？経済以外の様々なところへ切り口持って行きますと、なんとも面白い‘豊か’な国だと思うのです。そんなエピソードを少しご紹介します。

ちょっと道を尋ねるために立ち寄った家で‘ご飯を一緒にどうぞ’と誘われたことがあります。よく見られる風景でして、自分の分さえ満足にならない時でも笑顔で誘ってくれます。お金や物はみんなとシェアすることが当たり前のようです。市場で法外な料金を請求され怒りながら帰ってきた私に、お隣のラオス人がこう話しました。‘その料金を請求した人の気持ちを考えてみなさい、それだけ生活に困っているのかもしれない。あなたは自分が損をしたことばかりに目を向けているけれ

ど、その人の背景にも目を向けるべきよ’様々な場面ではっとさせられることがこれまでにたくさんありました。

首都ビエンチャンは地方に比べ発展が著しく、人々の生活は日本人のそれとほとんど変わりません。若者は洋楽を口ずさみ、日本とそっくりのファッションで身を固め、携帯電話のメールを片手で熱心に打っています。しかし、そんなことができるのはごく少数で、街から15分もバイクで走れば、そこは一面、田やうっそうと茂る熱帯の木々の緑、電気水道もなく、その日暮らしをしている人々が大半です。そして、街から離れれば離れるほど、平日でも学校に通っていない子どもたちをたくさ



ん見かけます。

私はここで教育分野の活動に携わっています。両親の仕事を手伝うため、通える範囲に学校がないため、学用品を買い揃えることができないため、理由は様々ですが、4人に1人は小学校へ通っていないと言われていました。中学校へは2人に1人、高校へは4人に1人しか通っていません。学校に通えれば、例えば読み書きができるような仕事の範囲が広がる可能性があったり、ちょっとした知識が命を救うこともあります。一人でも多くの子どもが就学の機会を持てるように、お手伝いできればと思っております。東南アジア青年の船の

ラオス人既参加青年たちも、地方の子どもたちを支援する活動をしています。

阪神大震災の際に、タイのあるスラムの人々が約300万円の義援金を集めて送ってくれました。ラオスからも、義援金を送った人がいると聞きました。困難な状況にいる自分のことを思ってくれる人々が遠い外国にもいる、それが見知らぬ人だったりもする、なんだか素敵じゃありませんか？様々な援助活動にはそれぞれの問題があり、よく批判もされます。しかし、困っている人へ優しさを分かちたいという原点の気持ちを忘れないようにしたいです。



## 亜州青年論壇（マレーシア）に参加して

第20回「青年の船」・第14回「東南アジア青年の船」参加青年  
桶谷 正一

8月31日のマレーシア NATIONAL DAY に合わせ NGO レベルで開催された亜州青年論壇 (ASIAN YOUTH DIALOGUE: AYD) に、IYEO にも招へい状が届き、参加してきました。

招へいされた外国青年は、各国、地域を代表する中国系青年団体の代表者たちで、アセアン諸国や中国、香港、台湾などから約70名、マレーシア各地の主催団体からボランティアも含め約200名おり、彼らが NATIONAL DAY 前で賑わう首都クアラルンプールに集合したのは、8月28日でした。

### ○ユニークな企画に果敢に挑んだ華人青年たち

AYD は、在マレーシア華人系8大青年団体の合同企画主催で、各団体選出の大会委員と作業グ

ループが中心となって運営していました。もちろん各団体のボランティアもプログラムの重要な担い手でした。大会横断幕を広げて空港に出迎えてくれたのもボランティアの青年で、市内まで私を送ってくれたのは、第29回「東南アジア青年の船」事業既参加青年である MR. DANIEL であったのは偶然でした。彼は、私を“SENIOR EX-PY” (既参加青年) と呼び、初めての会話に親しみを添えてくれました。

3泊4日のこのプログラムには、首都および郊外へのバスツアーが組み込まれていました。ホテル会場におけるスピーチ、レクチャー、グループ別討論とそのプレゼンテーションからなっており、プログラム前後には、初めて会う青年たちとは食

事やバスツアーでリラックスした会話を楽しむことができました。

グループ討論は、周到に準備運営され、討論中もパソコン画面で要点を示し、直後の発表は大型プロジェクターで発表されるという短時間で効果的なものでした。



#### ○青年活動の重要な位置づけ

スピーチでは連邦政府より黄住宅及び地方政府部長官、レクチャーではRAZALI前国連ミャンマー担当事務局長やRUSLAN青年体育部総監など政府関係者や著名人が、青年活動の重要性をそれぞれの分野を通じて語りかけました。特にRUSLAN氏は「東南アジア青年の船」にも一部言及し、青年活動の健全な発展こそ、最重要課題であると言い切っていました。

私の参加したグループ討論のテーマは、アジア青年指導者相互の交流を具体的にどのように確立するかというものでしたが、その中でも青年活動に対する政府のサポートも必要であるという論議がありました。マレーシア地元参加青年の当事者意識の高さと討論の中で見せてくれた熱心な姿勢から、日本における青年および、その周囲の現状には、まだまだ活動の余地や参加意義があるのではないかと思いました。

また、主催青年団体の1つである「青創会」代表DR. THOR HONG TONG氏は第9回「東南アジア青年の船」事業(SSEAYP)の既参加青年で、今も青年活動のトップを続けていることを尊敬するとともに、SSEAYPの絆を感じました。



 IYEO 会員の皆さまへの “お知らせ” ページ 

《栃木県 IYEO からのお知らせ》

今年度の関東ブロック大会は栃木県にて開催されます。

『君も世界に羽ばたこう！～さぁ、あなたももう一度～』をテーマに、楽しく実り多き大会になるよう、企画準備に奮闘中です。1日目には歌手・ギタリストのアントニオ・古賀氏を迎え、「人間の和、人との和」について熱く講演していただく予定です。その他、日本一の喜連川公方太鼓の演奏や懇親会、ワークショップやオブショナルツアー等盛りだくさんの企画を準備しております。

一人でも多くの方のご参加を心よりお待ちしております！ぜひ、お越しください！！

と き：平成16年2月7日(土)～8日(日)

と ころ：国民年金健康保養センター きつれがわ

参 加 費：宿泊 10,000 円、日帰り 7,000 円

\*参加申込等お問い合わせは、関東ブロック大会実行委員長 赤木克葉

(電話&FAX：028-653-5154、e-mail: katsuha@gray.plala.or.jp)までお願いいたします。

編集後記

神戸の全国大会も終了し、韓国、中国の招へい事業も順調に進行して、交流の2003年の秋が終わろうとしています。国内、世界情勢共に不安定

な状況にあります。こうした時こそ将来を見据え、現在できることが何なのかを認識して実行していかなければいけないのでしょう。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、財団法人青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM (マクロコズム) 11月号 Vol.55 2003年11月20日発行 (隔月発行)

編 集：マクロコズム編集委員会

発 行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail [hq@iyeo.or.jp](mailto:hq@iyeo.or.jp)

URL <http://www.centerye.org>

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力：内閣府政策統括官

(総合企画調整担当)

日本青年国際交流機構

定 価：198 円 (本体 189 円)

印 刷 所：株式会社 絢 文 社

TEL 03-3959-3960

教育コース（福島県）



◀ 尚志高等学校にて国際理解の授業を行う



会津藩校「日新館」にて弓の体験 ▶



▲ 会津大学訪問

リーダーシップ・コース（函館市）

井上博司函館市長へ表敬訪問（後列中央、井上市長） ▼



▲ 大沼の果樹園農家で開拓の苦勞を  
伺うとともに「ぶどう狩り」



函館市役所の方から  
榎本武揚についての  
講話を受ける ◀

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業

マスコミ・コース (岩手県)



◀ めんこいテレビ



▶ グループ活動の同行メンバーとの懇談

修了式

▼ 香川内閣大臣官房審議官より各国ナショナルリーダーへ修了証書が授与されました



▶ ケーブルテレビ

グローバルユース・カンファレンス

～ 9月30日～

(全体会での発表)

▼ マスコミ・コース



▼ 教育コース



1973年2月14日。一隻の大型客船が横浜を出航しました。歴史的な日本初の世界一周クルーズへの出発です。それが、初代「にっぽん丸」。現在の「にっぽん丸」はそれから数えて3代目です。この間、私たちは、日本のクルーズの先駆者として、新しいクルーズや様々なサービスを開発してきました。例えば、日本船初めての展望浴場などは、ほんの一例。また、私たちの長い経験の集大成である独自の船内プログラムが、他の日本客船全てのお手本になっていたりもします。ところで豪華客船でのクルーズと言うと、リタイア後の老夫婦がのんびりと旅をされているイメージをお持ちではないでしょうか。でも、「にっぽん丸」に乗船してこられるお客様は、驚く程アクティブな方が多いのです。いや、アクティブになられると言った方が正しいのかもしれませんが。これまでの人生になかった新しい体験を、船の上で得た新しい仲間達と一緒に貪欲に吸収されるのです。自ら進んで何か新しいものを得ようとする気持ちを冒険と言うとすれば、冒険には年齢や性別なんて関係ない、私たちは、そんな皆さんの想いを満足させることを一番大切に考えています。そして私たち自身も、お客様に負けないうらいに、いつも新しい事に挑戦して行こうと思っています。これまでも、ずっとそうして来たように。

冒険する生活を選びました。

冒険する生活  
にっぽん丸



にっぽん丸は、米国公衆衛生局 (USPH) による船舶衛生検査において、3年連続で日本船最高得点を獲得しました。

クルーズデスク フリーダイヤル  
0120-791-211



商船三井客船

<http://www.mopas.co.jp>

美しい時代へ——東急グループ



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。

## ひとりひとりに、満点旅行。

ONE  
to  
ONE



家族水入らずで楽しめるプランを。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、あなたの旅をさらに快適に。

どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様に満足していただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、多彩な商品をご用意。IT活用による最新情報入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして旅を熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考えます。



**東急観光**

国土交通大臣登録旅行業第38号  
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員  
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号  
<http://www.tokyukanko.com>  
<http://tour.tokyu.com>

マクロコズム

2003年11月号

通巻五十五号隔月発行

定価一九八円(本体一八九円)

編集協力...

内閣府政策統括官  
(総合企画調整担当)  
日本青年国際交流機構